ヒューマン・リレー

朱崎ナオヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒューマン・リレー

【Ｎコード】
Ｎ００８１Ｈ

【作者名】
朱崎ナオヤ

【あらすじ】
『一等賞品当選！おめでとうございます！』一枚のハガキが男の人生を狂わせる……

（前書き）

初投稿です。
つたない文章ですが温かく見守っていただければ幸いです。

1

『一等賞品当選！　おめでとうございます！』

小さな段ボール箱と共に送られてきたハガキにはそう書かれていた。

オレはもう一度じっくり読み返す。読み間違えではない。

一体何だろう？　心当たりはない。贈り主は『ヒューマン・リレー委員会』とある。

胡散臭いことこの上なかったが、最近の消費者保護法は優秀だと聞いたことがある。まあ、大丈夫だろう。

軽い気持ちでオレは段ボール箱を開けた。

目が合った。

最初は目の錯覚だと思った。次に悪友の悪戯だと思った。その次は思いつかなかった。けれど必死で考える。逃げ道を探す。現実逃避に没頭する。それほどに“ソレ”は衝撃的だった。

“ソレ”は人の生首だった。

紛れもない本物。この血の臭いは作り物では有り得ない。この肉の質感は作り物では有り得ない。この苦悶の表情は作り物では有り得ない。本物の生首。人の死体。屍。『死』そのもの。

「おっ……うぐっ、ぐげえええええええっ！」

たまらずその場でオレは吐いた。吐瀉物が部屋一面に撒き散らされる。

「ぐっ、う……く……」

一人暮らしでよかった、と思う。こんな状況を人に見られるわけにはいかなかった。

オレは一人部屋の隅で震え続ける。

2

どれくらい時間が経っただろうか。もう外は真っ暗だった。

なんとか少しだけ落ち着いた。もう一度落ち着いてダンボールの中身を確認する。

首はそのままそこにあった。

再び吐きそうになるのを堪えてオレはその首を見た。知らない男だった。苦しみと恐怖に醜く歪んでいたが、その顔はオレの知る誰とも合致しなかった。

ならば一体誰？　オレは思う。するとその時、段ボール箱の中に一枚の紙切れが入っているのを発見した。恐る恐る手を伸ばしてその紙切れを拾い上げる。

『警察には言うな、死にたくなければ』

と、書いてあった。

ただの紙切れ、たった十五文字の言葉。しかしそれは他のどんなものよりもオレに恐怖を与えた。数百本のナイフが自分に向けられているような感覚。内臓を舌で舐められているような気持ちの悪さ。明確な殺意を感じた。

とにかく警察に言うのは止めよう。警察が頼れるなんて限らない。簡単にすり抜けられるかも、いや犯人が警察であるのかも……。

しかし、警察に頼れなければどうすれば……。どう考えても死体が部屋の中にあるのは危険すぎる。すぐに腐って臭いを放ち始めるだろう。そうなれば終わりだ。殺人鬼だと思われても文句は言えない。

ならばどうする？　簡単だ。誰も来ないところに捨ててしまおう。それしか方法はない。

今の時間は零時十五分。今すぐ行くしかない。

3

幸いにも車を所持していたので首を運ぶのに難儀はしなかった。やってきたのは町外れの廃工場。近所で人気のない所というとそこしかなかった。

慎重に忍び込む。無人の工場は薄汚れていて不気味だったが、恐怖は感じなかった。当然か、それ以上の恐怖を今腕に抱えているのだから。

とにかく奥へ奥へと進む。誰にも見つかるわけにはいかないのだ。入り口に近いところは不安すぎる。

十分ほど歩いただろうか、一番奥の部屋に辿り着いた。錆付いた機械や資材が乱暴に放置されている。ここならきっと大丈夫だ。部

屋の一角に積み重ねられていた大量の段ボール箱の中に持ってきた段ボール箱を紛れ込ませることに成功する。これでいい。

やるべきことはやった。オレは後ろを振り返り、一気に駆け出す。一秒たりともここに留まりたくはなかった。持てる力を限界まで振り絞ってオレは走る。

「ハァッ、ハァッ……」

逃げる。

「ハァッ、ハァッ……」

逃げる。

「……ハァッ、ハァッ！」

逃げる。

この一日をなかったことにするために。

「……ハァ、ハァ」

何とか工場の入り口まで戻ってくることが出来た。安堵のあまりか、腰の力が抜けた。力が抜け、その場にへたり込んでしまった。

「ハハハッ、これでオレは、助かっ……」

最後までその言葉を言い切ることは出来なかった。後頭部に強い衝撃を感じた。意識が薄れ、消えうせる……。

4

「……さて、次の走者は」

ぐったりした男を車に乗せ、呟く。
月の明かりが手に持っているものを照らし出した。

『一等賞品当選！　おめでとうございます！』

生首のバトンは次に渡る。
ヒューマン・リレーはまだまだ続く。

ハガキに宛名が書きこまれた。

（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0081h/

ヒューマン・リレー

2010年10月15日23時34分発行